

# 理科室の門番



poripeimosu

長く伸びた黒髪に、落ち度はなかった。

朝から、もう幾度もチェックを重ねている。通り慣れた路地のカーブミラーで、ふるい車の汚れたミラーで。

私は一年前とは明らかに変化した自分をそれらに映しこんでは、このからだが卒業式を控えた学校の廊下を、あの人に向かって行くのを想像して、束の間、陶醉した。

\*

一年前、私は理科室の大量のビーカーを洗う「理科室の門番」の背中に向かって、生まれて初めて人に「好きだ」と、暴れる気持ちを投げ打った。あの日も、梅の香りが町中に漂う三月で、今日のように淡い青空を広げていた。

彼は、どんなときも職員室にはおらず理科室にいた。彼の私物が増える過程はあっという間で、そこはすぐに彼の部屋のようになった。生徒からはいつしか「理科室の門番」と揶揄されるようになったが、私は彼を声も届かない外側から眺めては、夢中になっていった。

先生は、私の告白を聞いてもビーカーを洗う手を止めなかった。足の爪先に落ちるビーカー同士がぶつかる乾いた音に煽られて逃げだしたい衝動に駆られたが、先生が手を動かすたびにゆらゆらと動く、シャツの皺の下の美しい筋肉を想像しては思い留まった。

やがて先生は突然洗うのをやめて、こちらを振り返った。流水音が室内に響き渡っている。それを気にも留めない様子で彼は私を上から下までじっくりと眺めると、小さく首を振った。

「それは、どういう意味ですか」

聞いた私に、彼は答えた。

「髪が短い。その髪が腰まで伸びたら、もう一度来てください」

そう言って洗い場に向き直ると、再び洗いかけのビーカーに手を伸ばした。そして何もなかったかのように、シャツの皺もまた先ほどと寸分の違いもなくゆらゆらとし始めた。

\*

納得のいかないまま、一年が過ぎた。

しかしただ漫然と過ごしていたわけではない。私は納得がいかない、納得がと思いながら、だが髪を伸ばし続けた。小さい頃から柔らかく猫毛な髪はなかなか思うように伸びてくれず、特に肩を過ぎるまでの日々は果てしなく続く拷問のようにさえ感じた。けれど私は髪を伸ばすことを諦めなかった。同時に、理科室や門番に不用意に近づくのをやめた。髪が短いままでは、その資格さえ手にしていないのと同じであるように感じたからだ。それでも私の中で暴れる、このコントロール不能の恋の気持ちは衰えることなく、あの三月に見たシャツの皺を思い出すだけで私の血は簡単に沸騰した。距離が生まれれば生まれるほど、髪が伸びれば伸びるほど、私の中の彼への想いは上昇し、濃くて甘い確かなものになっていった。

卒業式を控えた学校はとても静かだが、まるで夢の中で見るそれのように、どこか輪郭のはっきりしない中途半端さがある。今なら私の思い通りに、私のためだけにかたちを変え、優しく包みこんでくれそうな気配さえあった。灰色の廊下を上履きの底で鳴らしながら、やがて私は理科室の前に立った。腰までの髪を二、三度指で梳き、一度も引っ掛からないことを確かめてから、

制服のブラウスのボタンが一年前と同じように一番上までしっかりとめられていることを触れて認めた。

ドアを開けると、門番は今日もいつもと変わらずそこにいた。

許しを請うこともせず中に足を踏み入れ、ゆっくりと扉を閉める私を彼は頬杖をついたまま何も言わずに横目で見えていたが、次の瞬間、突然小さく噴き出した。

「もしかして、以前の、子か」

彼は笑いながらそう呟くと、近づいた私の前に立ち、また私を上から下までじっくりと観察した。だから私は彼がよく見えるように、一度彼の前でターンしてみせた。

「髪が伸びたので、来たんです」

「そうか。いや、驚いた。全然気づかなかったな。君は確か、いつも髪をこう、後ろに結わえていただろう」

彼は頭の後ろで髪を束ねる真似をしながら、やはり柔らかく笑って言った。制服の下の皮膚が粟立つのを感じる。心臓は、そのまま乱れて壊れてしまうのではないかというほど暴れていた。

「それは、口から出まかせ？」

彼が私を見ていたということに混乱して、見たこともない顔をして笑う彼の、切れ長の目を見つめて聞いていた。だが彼はまた噴き出すと、

「もう一度、回って見せてよ」

彼は理科室の大きな教卓に凭れ、綺麗に切り揃えられた爪をした人差し指を立てると、小さく円を描いてみせた。今日の彼は一年前と違って礼服に包まれていて、隙丸出しのシャツは仕立てのいい上着の下にすました顔でおさまっている。まるで鎧だな。思いながら、私は再び優雅にターンしてみせた。からだはまた彼の目の前で止まると同時に、ああそうだ、彼はこの理科室を守る門番だったと不意に思った。

彼は見降ろすように私を見たままで、何も言わなかった。廊下の遠くの方から、徐々に登校してきた生徒の声が聞こえてくる。沈黙に耐えきれず、

「どう、先生、私、伸ばしたのよ、だから」

勢いに任せつつもりが、そこから先は声が震えて続かなかった。髪に覆われたうなじが汗ばむのを感じる。かきあげたい衝動に駆られたが、必死に耐えた。先生の薄い唇が動く気配があった。

「次の三月が来たら」彼は落ちてきた前髪を掻きあげながら続けた。「もう一度、僕に会いに来てください」

それだけ言うと、通り過ぎざま、脇をすり抜ける猫のからだを撫でるように素早く私の頭のかたちをなぞった。背後で扉の閉まる音がしたけれど、触れられたところが熱を持ち、私は石のように硬くなって動けなくなってしまった。

やがて廊下が生徒たちの声で満たされ始めたとき、私はようやく硬直から解けた。からだは柔らかくなると、夢の中のようだった学校も普段と変わらぬただの無関心な箱に戻っていた。

私はそばにあった椅子によろよると腰かけ、先生の口にされた言葉を反芻した。

結局彼は、下手な言い訳もしない代わりに気持ちを見せなかった。けれどそのことに、私の心

が波立つことはない。彼の心が一年前から決まっていたことは百も承知だ。彼は私を好きにならないし、夢中にもならない。理科室の門番である彼の心は、一生徒である私に動かない。そこには初めから少しの可能性も残されてはいなかった。私はそれを一年前に確信していたが、彼の言った「髪が短い」というどうしてもなく下手くそな遠ざけ方を、いっそう愛してしまった。卑怯だとか潔く諦めようだとか思うよりも先に、彼のそういうところが死ぬほど好きでどうしてもなくなってしまうていたのだ。

けれど私は、今、身が切れるほど強く思う。次の三月、私が再びこの理科室を訪れることはないだろう。そして彼は、きっとさっきの沈黙でそれに気づいた。

私は、先生が素の笑顔を見せてくれたことだけで、思っていた以上に満足してしまっていたのだ。ほら見て、私はここまでやったのよ。一年前の私を侮っていた先生の前で得意気にターンを決めたら、身体から何かが剥がれ落ちていくような感覚に襲われていた。焦燥に駆られて、拙い言葉を吐く私に、はらはらと零れ落ち続けるそれはやがてあるかたちとなった。

盲目の人の手のように、私の指先はそれに僅かに触れただけで、その正体を見破った。何のことはない、それは、以前、私の中にあつた無垢で、純粋な、恋心だったものだった。

ショックだった。ちょっと待ってくれ、そんなはずはない。思ったが、それは私からどんどん剥がれて、吹き溜まりの枯れ葉のように積もっていく。

先生だけが容易に見抜いた。それだけに留まらず、彼はもう隙を見せることもしないで、熱く優しい手で周到に私を慰めてもみせた。そこまでされて、認めざるを得なくなってしまった。ここを離れてしまえば、私はもう彼に深く潜り込んだりしない。私の恋心は、いつの間にか純真さを失い、醜いものにかたちを変えてしまったのだ。

あれほど好きだと溺れた気持ちは、どうしてかたちを変えてしまったというのか。

学校が、最後の予鈴を響き渡らせ、私を押し出そうとしている。

扉を開け、ひんやりとした廊下に出る。早足で歩きながら、手首に通していた黒い地味なゴムでいつものように髪を高く上げてまとめた。首筋を冷たい風が通り抜けていくと、胸が締めつけられるように痛んだ。

廊下の先で私を見つけて手を振る友人に手を振り返し、どこへ行っていたの、などと冷やかされながら、私は友人の胸にすでにおさまっているピンクの清らかなカーネーションに目を細めた。さあ、私も早く同じ花をこの胸に刺さなければならない。

私は今日、この学校を卒業する。かつて美しかった私の心を置き去りにして。

了